

老舗330年 波こえて



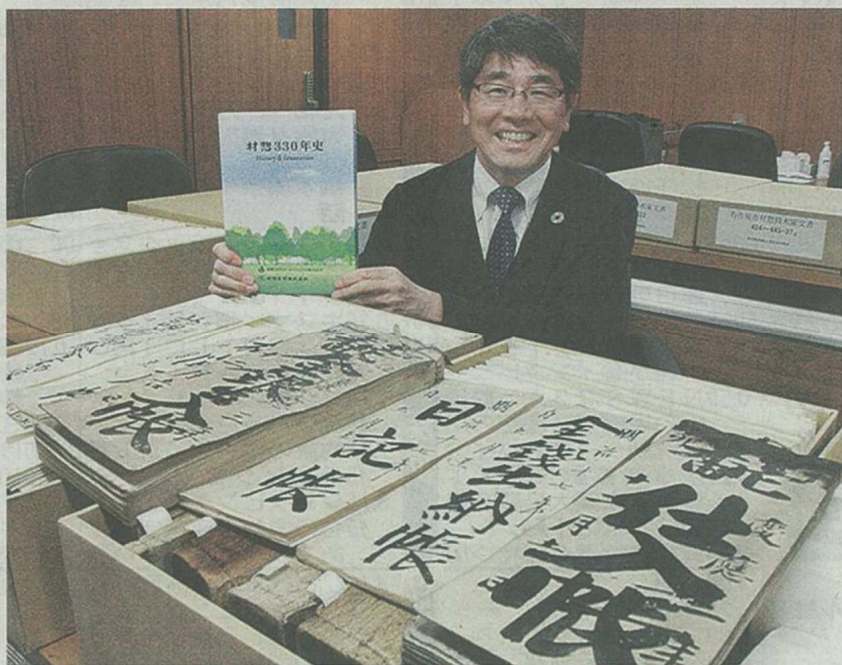
江戸時代の1690（元禄3）年に創業した名古屋市の老舗企業「材惣D MBホールディングス・材惣木材」で、草創期からの帳簿や明治から大正時代に活躍した社長の日記など約3400点の資料が見つかり、同社が「材惣330年史」としてまとめた。明治維新の激動期や近代化で名古屋の都市が形成される歴史に同社が深く関わった様子が記録されており、専門家は「戦災に遭わずに残った貴重な資料。名古屋の近代史を考える上で非常に重要だ」と話す。（中崎裕）

名古屋の「材惣木材」江戸-大正の記録3400点

職人に苦勞 ■ 陳情で悲嘆 ■ 受注の喜び 克明に

材惣木材は、江戸時代に知多から名古屋に進出した材木屋惣兵衛にルーツを持つ。五代惣兵衛の時代に、東本願寺名古屋別院（東別院）の再建材の調達を一手に担ったことで名字帯刀を許され、尾張藩御用達の商人となった。

新たな資料は、名古屋商工業会議所（現・名古屋商工会議所）の会頭や貴族院議員を務めた八代目鈴木惣兵衛（一八五六―一九二五年）の日記や、元禄年間から大正時代に至るまでの取引を記録した帳簿など。二〇一一年に本社を創業地周



④ 8代鈴木惣兵衛「材惣D MBホールディングス提供」
⑤ 見つかった江戸から大正時代にかけての資料からまとめた330年史を持つ鈴木龍一郎社長（名古屋市中区で）

辺で保有していた中区錦一のビルに移転した後、同じの金庫や社長宅に保管されているのが見つかった。分析した日本福祉大の曲田浩和教授（日本近世近代史）によると、膨大な資料からは、初めて克明に分かったことが多い。特に注目されるのが、愛知時計製造（現・愛知時計電機）の社長などさまざまな企業経営にも関わり、政財界で活躍した八代目の日記だ。

市街地や港の近代化支える

記述では、八代目は鉄道整備で枕木の受注を喜んだり、中央線の早期建設の陳情が失敗し悔しかったり。一八九一（明治二十四）年の濃尾地震で被災した際の様子も記されていた。

また、明治維新後に官有林だった木曾ヒノキ調達に向け現地を踏査。山から木を運ぶ拠点の「会所」を組織し、木を切る職人らと交渉していた。職人らとの付き合いの苦勞を従業員が幹部に訴える手紙、職人との関係を円滑にするため酒を提供した記録も見つかった。これらの各種資料について同教授は「臨場感が伝わる」と指摘。時代に合わせた時計や木箱、電柱など木材需要を捉えて成長する会社の姿とともに、市街地拡大や名古屋港の整備で重要な役割を果たしていたことも具体的に分かった。

十二代目の鈴木龍一郎社長（〇）は「土地を売るなど苦勞しながら、経営をやっていた。商売には浮き沈みがあり、必ずいろんな波が来る。それを乗り越えられるかが大事だと改めて感じた」と話し、コロナ禍で市場が縮小する今と重ねる。完成した社史の本編に加え、来年三月には資料編をまとめる予定という。

執筆に携わった曲田教授は「社史には資料に残されていた当時の生の声を重視し記した。鈴木惣兵衛という名古屋の経済、政治、文化の発展に尽力したスケールの大きな人を知る取っ掛かりにもなれば」と話す。